

IV 搾乳ロボット牛舎編

～より快適で自由な環境とおいしい餌で乳牛の自発的行動を促そう～

搾乳ロボット牛舎のあと二口食わせる技術の基本は乾乳牛・繋ぎ飼い・フリーストールと共通ですが、特に搾乳ロボット牛舎で乾物摂取量を上げるポイントは換気とエサです。

☆新鮮な空気を胸一杯吸える環境を！

搾乳ロボット牛舎では一般的に牛舎の幅や長さが広くなり、換気には不利となります。また、搾乳ロボット周辺の空気がよどみやすいという特徴があります。

- 牛舎側面をできるだけ開放するなど、送風機を活用した強制換気が必要となります。
- 搾乳ロボット周辺は、大型ファンなどを設置し、空気のよどみを減らす工夫が必要です（写真1）。
- 冬期間は、凍結防止のため牛舎を閉め切る事例が見られます。搾乳ロボットの凍結防止対策を行い、可能な限り風下側のカーテンを開け、必要に応じて牛舎内の換気扇をゆっくり回して換気に努めます（凍結防止対策事例としてロボット室内へのストーブ設置やバルククーラーの廃熱活用があります（営農改善資料 P35 参照））。



写真1 搾乳ロボット前の空気を動かす

☆おいしいエサが常に牛の口に届く！

エサが常に牛の口にある

- 搾乳が個別となり、飼槽で一斉に採食されることはありませんが、いつでもエサが食べられる状態が必要です。
- エサがあっても牛の口に届かなければ意味がありません。理想は24時間掃き寄せし続けることですが、現実的に難しく、自動エサ寄せ機を導入して1～2時間おきに掃き寄せする事例が増えています。



写真2 自動エサ寄せ機の活用

おいしいエサの確保

- 搾乳ロボット内で配合飼料を食べるため、飼槽の混ぜエサは粗飼料の割合が多くなります。そのため、粗飼料品質の良否が採食量を左右します。
- 粗飼料の栄養成分や発酵品質を高めるために刈り取りステージ、水分調整、添加剤の活用を見直すことが重要になります。

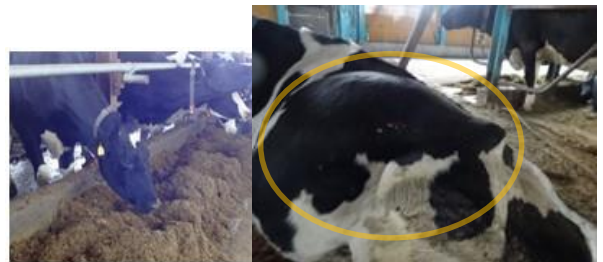


写真3 目指せ！腹いっぱい食べている牛の寝姿